



## 倉橋から子どもたちへの伝言

### 思い出を越えて——バンクーバーにて——

コピソン珠子

#### 一冊のアルバム

いま、私の机に飾ってある一枚の絵はがきを眺めながらこの文章をしたためている。本多玉枝（昭和十七年卒のクラスメート、当時の名前は、小野田トミ子）の『なつかしい玄関』と題するもので、まさにそれはお茶の水の附属幼稚園に通った私たちにとっては、いつまでも忘れることのできない『玄関』だ。これこそ当時の思い出のシンボルでもある。

私は昭和十（一九三五）年生まれ、昭和十五年、東京女子高等師範学校附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）、林の組に入園、十七年修了。その後、続いて

三年生まで同附属国民学校に通った。しかし、一学期も終わると、悪化する戦争のため私たちのクラスもナリザリバラバラになり、私は個人疎開を余儀なくされた。何度か移り変わる疎開地への荷物の中に、私の母は一つ大切な宝物をいつも入れておいてくれた。きっと将来、何かの役に立つことを信じていたのであろう。それは赤い表紙の私たちの幼稚園卒業アルバムだった。いまだこそカバーはいささかはげてしまったが、この『宝物』は現在、バンクーバーの私の書齋で健在、何かにつけては昔といまの大切な絆となっている。

このアルバムの写真を一枚ずつ眺めていると、戦争が始まったも私たち幼稚園児の日々は真に楽しいものだった

たことを思い出させてくれる。当時のことを私たちの担任の清水光子先生はいつぞや、次のように話してください。たことがある。「先生たちは、どのようにしたらみんなが毎日楽しく遊べるか」そのみを常に考えていてくださったこと。私たちは真に子どもらしく遊びを通じて成長していったのだ。成長していく過程で、遊びがいかに大切な要素であるかは、今日、世界各地で強調されながらも、おろそかにされがちである。

私たちの先生方は戦時中、物がだんだん消え失せていく時、子どもたちへの深い愛情と献身で私たちと日々を過ごしてくださいましたのだ。その戦争中のご苦労はいかばかりだったか。いま、私は深い尊敬と感謝に堪えない。

## 日本の戦地となった

### 東南アジア、中国本土、香港で思う

私の夫がカナダの外交官だったころ、私たち一家は東南アジア、中国本土、香港に赴任した。いずれも私にとつて大東亜戦争とつながる思い出のある土地だ。私は母と

一九六五（昭和40）年シンガポールを訪ねたが、そのシンガポールが陥落した一九四二（昭和17）年二月、幼稚園の屋上にて全校で祝賀記念撮影をした。その日にゴムボールとキャンディーをいただいたことはいまでも忘れられない。これは陥落シンボルのようなものだったのでろう。一九七〇年代前半、北京を中心に私たちは中国に住んでいた。カナダは日本より一步早く中華人民共和国と国交樹立したので、幸いにも一九七二（昭和47）年九月、日本国と中国の歴史的国交樹立に立ち合うことができた。北京の秋晴れはその色も深く幅も広い。その異国の天下で数十年ぶりに初めて演奏された『君が代』、揚がる日の丸を目前にした私は複雑な思いで目頭が熱くなった。多くの中国人を殺害、また苦しめたあの東大東亜戦争。あの歴史的宣戦の日に、私はこの幼稚園にいたのだ！

### パシフィスト倉橋先生の思い出

——「大きくなってから思い出してもらうために」——

もちろん、わが幼稚園の銀杏の大樹、美しい藤棚、毎

日遠路を送り迎えしてくれた母、そして、とてつもないほど楽しく遊んだ毎日のことは、いまでも昨日のこのようにはつきり記憶にある。しかし、今日その時代を思い浮かべるといつも私の心の中には幼稚園と戦争の思い出が重なり合っているのだ。二〇〇六（平成18）年十一月、当幼稚園の創立一三〇周年記念式典に参加するため、私は心新たに私たちの卒業アルバムをゆっくりと一ページずつめくっていた。主事の倉橋惣三先生は、いつも私たちと一緒に遊びたくなるようなお人柄だった。一九四〇（昭和15）年四月二十二日、初めての保護者（当時は全員女性）参加の久米川遠足にも同伴なさり、その時の記録写真には先生はあぐらをかき、真ん中に座り込み、お膝の上には一人の幼稚園児が座りこんでいる。

私たちの幼稚園修了を祝ってこのアルバムに残された倉橋先生の生徒へ送る言葉は、いつ読んでも私の心を強く揺さぶるものがある。これは「大きくなってから思い出してもらうために」と題した短文で、私にとっては時がたつに比例してその意味もより深くなっていく。

「昭和十六年十二月八日。あのアメリカとイギリスとに對する宣戦の御詔書がありました日、あなたは此の幼稚園にいました。この日は、日本は素より、世界にとって、永久におぼえられる日です。あなたは、ほんとうに大きな日に幼稚園にいました。先生方は、この日の意義を、あなた方にどうして正しく伝えようかと苦しみました。

（中略）

やがて戦争中のお正月が来ました。あなたはふだんよりも貴い一歳を加えました。その八日は第一の詔書奉戴日で、幼稚園全体で、「ニッポンハツヨイ。コノイクサニ キットカツ。ワタクシタチモ キット ヨイコニ ナリマス」と、声を揃えて言いました。（中略）

この大戦争は長期戦であり、宣戦の御趣旨を完遂するのは大事業です。それには、あなたがおとなになる日、しっかりお国の為に尽して下さることを、きつと待っていますと、先生方は、あなた方の顔を見つめては、心から念じていられます。

昭和十七年三月 附属幼稚園主事室にて 倉橋惣三

(旧漢字・旧仮名遣いを、新漢字・新仮名遣いに直した)

まず右記にあるごとく、先生がこの戦争の意味をどのように子どもたちに伝えるべきか、大変苦勞なされたことがうかがえる。子どもたちには偽りは言うまいと。正しい戦争が有るはずはないから。またあの宣戦の日は世界が永久に忘れてはならない程の意味が有ること。まず私からみると先生は完全なパシフィスト、平和主義者であつたに違いない。そしてその思いをこのような形で當時、書き残しておいてくださった先生の偉大なる勇氣に、私は深く感動する。官立の教育機関である幼稚園などは特に文部省、そのほかの政府の厳しい監視のもとにあつたに違いない。後になって私たちの担任、清水先生は監視する役人が倉橋先生の所有物、行動などを調べに頻繁に幼稚園にやつてきていたことを口にしていらつしやつた。「ニッポンハツヨイ。……」の決まり文句はそうせねばならなかつた当時の実態を書き残しておいてくださったのだと私は読み取るのだ。

これが大戦争であること(なぜこのような戦争をせね

ばならないのか)。そして、とても日本のために完遂できそうな戦争ではないこと。卒業していく幼児の顔を見ながら先生は日本の将来、世界の将来を案じて、国のために成るといふことはいかなることかをよく考え、平和な「お国」のために尽くすことを念じていらつしやつたのであらうと私は理解している。

第二次世界大戦が終わると戦争はもうコリゴリだ、もう二度と起こすまいと、誓つたのは日本人のみではない。しかし、何と今日、日本人も含めた世界の多くの人たちは、人類が体験した戦争の無慘さをすでに忘れてしまつてゐるではないか。幼稚園二三〇周年記念にちなんで私が倉橋先生の文章を引用したのは、先生がまさにあの日のために書いておいてくださったように思えてならなかつたからである。単なる私の幼稚園の思い出としてのみではなく、思い出を越えて、一人の立派な幼児教育者の今日、全世界への教えではないだろうか。

(文化・教育・平和諸団体理事)

カナダ・バンクーバー(在住)